

学童疎開の日記より

品川区立原国民学校五年一組北川菅雄

疎開先 都下南多摩郡元八王子村 隣保館

「起床」の声に、布団をはねのけた。大寒を迎えた寒い朝である。すぐに布団を三つ折りにして観音開きの戸棚にしまふ。掛け布団は上の戸棚に積み重ねてしまふ。一番最後にやってきた三年生の神尾君のは僕と吉田先生で天井に近いところへ担ぎ上げた。

「全員洗面」と吉田先生のいつものものかん高い声。着替えをして窓際に干してあった手ぬぐいを取り、柳行李（やなぎごうり）の上にある歯磨き粉の入った紙袋とかなり毛の抜けた歯ブラシをもって玄関の下駄箱のところへ急いだ。ぼくのきききょうの花の模様が入った手ぬぐいは、今朝の寒さでバリバリに凍りついている。山中くんは、自分の凍りついている手ぬぐいを手の甲に平らに立てて見せた。「ほら、洗い張りをしたようだね」と言って笑った。下駄箱から歯がすり減って左下に傾き、不安定な下駄を土間の上にやや乱暴に置きつつかけると、人造絹系の靴下は、もろくも破れて左足の親指がまたも頭を表した。これで両方合わせて九か所も破れているがいつものこととて気にしない。駆け足で隣保館の門のすぐ外に流れている小川へ急いだ。小川の水をすくってブクブクとやった。手はたちまち真っ赤になり、口の中の感覚がなくなる。吉田先生はこの間寒暖計を入れたら二度だったとおっしゃっていた。「カーン、カーン、カーン」始まった。相即寺の朝のお勤め。六時三十分だ。（以下略）

北川さんは、機銃掃射で亡くなった神尾明治くんと同じ宿舎だった。後日品川区の小学校校長となった彼は、神尾君とランドセル地蔵の話子どもたちに毎年語り伝えた。（故人）